

平成 27 年度

第 60 回 長野県中学校連合教科研究会

保健体育科

I	研究テーマ	1
II	趣 旨	1
III	参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名	1～2
IV	研究問題と協議内容	3～6
V	本年度研究会の反省と来年度の方向	7
VI	あとがき	8

I 研究テーマ

一人一人の生徒が自ら進んで運動に取り組み、運動の楽しさや喜びを味わうことができる体育学習や、健康の大切さを理解し実践力を育てる保健学習はどうあったらよいか ～教材化の工夫と評価計画～

II 趣旨

生徒一人一人が技能を追究していく場面と、友と協力して課題を解決していく場面の関係性を明らかにし、教材化に視点をあてて検討していきたい。また、評価計画をグループワークで検討し、学び合いの場とするとともに、各校で生かせるものを作り出していきたい。

III 参加校テーマ一覧と参加者名、指導者名

第1分科会

・指導者	東信教育事務所指導主事	清水 直人 先生	
・司会者	塩尻市立檜川中学校	宮原 祐史 先生	
・記録者	松川町立松川中学校	林 努 先生	
・世話係	信州大学教育学部附属長野中学校	関谷 北斗 先生	
学校名	研究の要旨		
中込 中学校	仲間同士で技能のアドバイスをし合い、技能の上達を誰もが感じられる授業		中尾 州洋
下諏訪社 中学校	学習問題を抱えている友達に対し、有効かつ優しい言葉がけ（アドバイス）がある学習環境作り		工藤 知之
茅野東部 中学校	運動の特性や魅力に触れながら、仲間と願いを共有し、運動の楽しさを味わっていく保健体育学習のあり方 ～思考力・判断力を高め合う課題解決学習のあり方～		當銀 拓也
天龍 中学校	運動の特性を理解し、仲間と共に心と技を練り上げる体育学習のあり方		江木孝太郎
売木 中学校	子ども達が自ら学ぶ授業はどうあったら良いか		佐藤 和輝
丘 中学校	「わかった」「できた」が実感できる授業の創造		山根 諒介
豊科北 中学校	生徒自ら問いをもち、仲間とともに運動の楽しさを味わい深めていける体育学習		永池 祥樹
豊科南 中学校	自分の課題を持って、友と学び合いながら学習していく保健体育学習 ～教材化と学び合いを生み出す支援のあり方～		三村 徹
高瀬 中学校	自分の考えを仲間に伝え合い、技能の向上や作戦・戦術を練り上げていく指導の在り方 ～仲間の良さを認め合い、自分の良さを発揮できるグループ活動の在り方～		丹戸 政孝
屋代 中学校	仲間とのかかわりを深め、自分の力にあった課題を追求し、運動の特性・おもしろさの本質に触れた喜びを味わいながら、生涯を通じて健康で安全な生活を送ることができる生徒の育成		上條 絵里
旭町 中学校	守備・走塁に焦点を当てた、ベースボール型球技の教材化はどうあったらよいか		山本 一博
附属長野 中学校	理想の動きを理解して動きのイメージをもち、走・跳の技能を高めていくための陸上競技指導の在り方		関谷 北斗 中塚 洋介
附属松本 中学校	運動をとらえ直ししながら、自分なりの運動とかかわりを見つけていく保健体育の学習		有賀 浩之 浅川菜里奈

第2分科会

・指導者	南信教育事務所指導主事	有坂 栄康 先生
・司会者	安曇野市立穂高西中学校	岡村 浩男 先生
・記録者	長野市立裾花小学校	中村 深志 先生
・世話係	信州大学教育学部附属松本中学校	穂澤 正仁 先生
学校名	研究の要旨	
高遠 中学校	ダンス指導にiPadの動画機能を活用し、動画を見る観点を絞った支援をした。 学び合いによる技能・表現力の向上について、その指導方法や評価のあり方について	阿部 水香
泰阜 中学校	3分間セიმゴール走により、仲間と関わり合いながら主体的に活動する学習を構想した。 長距離走の特性に触れる授業について	倉澤 満
緑ヶ丘 中学校	剣道で、チームの仲間と話し合って練習し、アドバイスをし合っ、技能を高めさせる工夫をした。 剣道の指導におけるグループ学習のあり方について。	溝口 裕直
塩尻 中学校	全国体育研究大会岐阜大会に参加して・ダンスの授業を参観して学んだこと。 ダンス領域の授業を、どのように展開していったら良いか。	堀田 茂樹
三郷 中学校	バスケットボールを教材化したドライブバスケットを行い、積極的にシュートまで行くように工夫した。 意見交換や関わり合いを生むための教師の支援。本教材を発展させたものの工夫。	山岸 真大
高社 中学校	マット運動で、4人組のグループ活動を行い、学び合い・関わり合いが必然的に生まれる工夫をした。 グループでの活動を基盤として学習を進めていく中で、どのように個人の技能を高めしていくかとその評価。	前澤 健太
若穂 中学校	バドミントンで、生徒の実態に合わせた学習課題を設定し、支援の仕方について工夫した。 生徒の実態に合わせた学習課題の設定とその支援について。	小幡 秋生
信濃 中学校	ソフトボールを5年生～9年生（5年・6年・中1・中3）で行い、系統性を持たせた工夫。 つける力の系統性とルールの理解について。	小林 克年
鎌田 中学校	剣道 教える内容の明確化 学習資料・学習カード・単元ガイダンスの充実 一人ひとりが課題をもって学習に取り組める教材化はどうあったらよいか。 活動場所・活動時間、道具の充実を各校どのように行っているか。	洞口 淳
旭町 中学校	ベースボール型球技の教材化について。 守備・走塁に焦点を当てた、ベースボール型球技の教材化はどうあったらよいか	斎藤 香織
女鳥羽 中学校	「ハードル 幅跳び」個人差や個性をお互いに認め合っ、集団の質を高めしていく支援と部活動で学んでいる生徒がその種目でリーダーとして活躍する場の設定 コミュニケーション能力をさらに定着、活性化させるための手だてや自主的・自発的なコミュニケーションにつながるための指導の工夫はどうあったらよいか。3学年を通じての系統だった陸上単元のあり方。	山本 朗士
筑摩野 中学校	ダブルセットバレーを行い、生徒の思考・判断を高めるために知識の共通理解を図った。 思考・判断を「状況判断」「行動選択」と分けて考えているがどうか。思考・判断について、学習カード以外でどのように見取っているか。	古畑 敦史
附属長野 中学校	幅跳びの踏切動作や跳躍動作を撮影し、友と見合っ、技術ポイントについて話し合う活動を取り入れた。 撮影した映像を基に、動きの差の具体的な原因を明らかにし、技能向上に結び付けていくための手だて。	越田 真二 濱 彰吾
附属松本 中学校	マット運動で、運動をとらえなおし、自分なりの運動とかかわりを見つけさせた。 マット運動で、技能や経験の差を埋めるための教材化や単元展開の工夫。関わり合い、学び合いの支援。	穂澤 正仁

IV 研究問題と協議内容

【第1分科会】

(1) 発表されたこと

- ・ダブルセットバレーにおいて、単元後半になるにつれ「アタックしたい」「攻撃したい」といった生徒の思いと教師の目指す姿との間に違いが見られた。(豊科北中学校)
- ・セカンドキャッチバレーにおいて、どのような力をつけるためにどういう教材にするかが大事であることを感じ、教えて理解させる部分と、気づかせたり学び合わせたりする部分とを分けて提示していく必要があると感じた。(豊科南中学校)
- ・学び合いのあるバドミントンの授業を目指した。何を言えばよいかわからず、アドバイスが見られなかった。見合う観点の強調が大切であると感じた。(中込中学校)
- ・リレーにおいて、学習カードに「走順を変えたことがタイムにどう影響したか」を書くように示したが、難しさがあつた。思考力判断力をどう評価すればよいか。(茅野東部中学校)
- ・走り幅跳びにおいて、撮影した映像を基に理想的な動きとの差を見つけ、具体的な原因を明らかにし、技能向上に結びつけていく手立てを究明したい。(附属長野中学校)
- ・剣道において、特性に触れたり技能習得に時間をかけたりする時間を増やし、友達と協力しながら追求させたい。その為、防具の簡素化も必要であると感じた。(下諏訪社中学校)
- ・マット運動において、生徒同士で教え合う方がよいのではないかと感じ、学び合いを中心に行った。活動を活性化できる仕組みや流れを整えることが大切であると感じた。(売木中学校)
- ・マット運動の補強運動において、回転力や体を支える力を高めたりすること、また、後転の技能ポイント、場の工夫をどうしたらよいか。(丘中学校)
- ・マット運動において、場の設定や仲間同士の関わりをどうすればよいか。また、技をたくさん習得させることがよいのか、技のできばえを追求させればよいのか。(屋代中学校)
- ・マット運動において、自分の姿を見られることに抵抗がある生徒に、どのような活動を仕組みば意欲的に学習に取り組めるようになるのか。(附属松本中学校)
- ・ベースボール型において、係活動の充実まで手が入らなかったもので、来年度につなぎたい。また、作戦ボードがないと課題解決につながらないという場面をつくりたい。(天竜中学校)
- ・ベースボール型において、ルールや仕組みは理解できたが、技能の高まりがなかった。技能を高める練習を入れることができれば、ゲームにも生きてくると感じた。(旭町中学校)
- ・フットサルにおいて、学び合うことや伝え合うことを大事にしたい。話し合っているように見えても、実際は1人だけが言っている状況であるので改善したい。(高瀬中学校)

(2) 話し合われたこと

- ・ネット型の一番の課題はラリーを続けること。最初に授業イメージをつくり、ゴールをどこにもっていくかを明らかにする。単元後半で目指す姿をより明確にもっているといよい。
- ・ネット型で1番大事なことは役割行動。自分自身が何をしなければならぬかを早い段階で気づかせていく。役割がはっきりしてくると4段攻撃も可能になり、ラリーが発生してくる。
- ・初めて経験する生徒が伝えることは難しい。カメラのかわりに、動きを伝えてあげることくらいならできると思う。ポイントをしばって課題を設定することが大切であると思う。
- ・ICTを使い見返しをすることはよいが、見るポイントを決めだし明確にすることで、より関わり合いが生まれ、協働的に学んでいくことができるのではないかと。
- ・ICTを利用して跳躍角度を見れるように可視化したり、歩幅に合わせキャップを置いたりする手立てが良い。砂場で開放的にジャンプができればさらに記録も伸びるのではないかと。
- ・3年生になると隙を見つけて打ち込みたいという願いも出てくる。簡略化できることは簡略化し、学ばせたい内容に多くの時間を確保できるようにしたい。
- ・お互いに補助し合う部分で関わり合えるので、補助の仕方を教えることも大切である。また、3年生に1

年生が気づいたことを言うのはすごく壁がある。緩和させられるとよい。

- ・両側からマットを丸めてくぼみをつくり、そこに首がはまるようにする。くぼみにそって後転すると回転しやすくなり、スピードのあるスムーズな回転になる。
 - ・発表する技が多いが、できない生徒もわりと無理なくやれている。できない生徒も後転さえできれば、後転系の技もできてくる。
 - ・場の設定をするまでに生徒の願いが生まれてくるまで待ったり、なぜ必要なのかを問い返したりしながら活動を進めていくことが大切であると感じた。
 - ・ボールやバット、ルール of 工夫が必要である。特にルールについては、女子生徒にもわかるように易しくすることが大切である。また、教材との合わせ方も大事である。
 - ・守備練習に多く時間がかかってしまうので、意図的にバッティングや攻撃練習を多く行う必要がある。テニスラケットを使ったり打ちやすい球を味方が投げたりと方法を工夫している。
 - ・時間がなく、発表のみ。
- (3) 指導者の先生のご指導
- ・3人制は役割がはっきりし動きが活性化する。3人制から4人制に変えることで成果と迷う場面の両面がでてくる。それをレポートにしてくれるとありがたい。
 - ・ネット型では、最後は攻撃の形で相手に返球していくことが中心的な課題で、面白さ、特性につながる。ゴールを具体的にイメージし、どういう順番で学習を仕組むかを大切にしたい。
 - ・良い動きを見せる中で、生徒に学ばせたいポイントをきちんと教師が示したり、扱ったりすることが大切である。それが話し合う基となり、豊かな追求や主体的な学習につながる。
 - ・ICT機器は生徒が必要感をもって使えることが大切。何のために使うのか、いつ使うのか、誰が使うのか、どのように使うのかを、教師のねらいや生徒の姿に合わせて決めだす。
 - ・ドリルや補強運動を繰り返す中で、できていくことの楽しみや喜びを見つけていく生徒もいる。繰り返し運動することと考えながら運動することのバランスをどうとっていくか。
 - ・防具も変わってきているので、教師の意識も変えていく必要がある。剣道の面白さに迫っていく単元展開、授業づくりが大事。行うことの意味を伝えていくと、技能面にもつながる。
 - ・安全面確保のための補助ではなく、技能のポイントに関わりながら補助という活動を入れていくことで、学び合いの中身が変わっていく。
 - ・準備運動や補強運動はねらいに合わせ意図的に行うと効果的である。毎時間1つ新しいことを入れたり学習に必要な動きを入れたりすることで、取り組み方や意識も変わる。
 - ・1・2年生の2年間の中で、または3年生になった時に、どういうところを目指すかという大きな枠の中で、取り上げる技を決めだしていくとよいのではないかと。
 - ・課題を生徒のレベルに合わせる。簡単なことのように実は大事な視点である。目指すところを生徒と一緒に決め出すことが、主体的に動き出す原動力になる。
 - ・生涯スポーツに親しみ、豊かな生活を営んでいく生徒の育成を考えた時、技能だけでなく用具やルールを工夫したり、自分の持っているものを伝えたりしていくことが大切である。
 - ・場をたくさん確保し、運動量を確保することが大事である。苦手な生徒にほどたくさん経験させることで、技能のレベルが高まっていく。
 - ・男女共修と別修、それぞれのよさがある。学習方法や学習形態を工夫することで教え合いや学び合いも変わってくる。分析カードはその場に残り、思考を書けるので有効である。

文責者 松川町立松川中学校 林 努

【第2分科会】

協議題1 仲間と関わり合いながら、球技の特性に触れた楽しさを味わい、技能を向上させていくためのルールや場の工夫、教材化はどうあったらよいか。

(1) 発表されたこと

- ・トリムボールの使用は、ボールへの恐怖心を抑え、意欲的な活動につながった。リングにあたると1点というルールは、子どもがスペースに動く意識を下げた。作戦タイムや分析カードなども、子どもたちに必要感がないと消極的な活動になってしまう。(バスケットボール・三郷中学校)
- ・アドバイスカードには、知識を深めるものを書いておき、話し合う時の観点になるようにした。レシーブ・予備セット・セット・アタックで、1人1接触制限としたら、苦手な生徒の参加ができた。しかし、バレーの基本技能が身に付いていない。(ダブルセットバレーボール・筑摩野中学校)

(2) 話し合われたこと

- ・その種目の特性を失わないように教材化をすすめる大切さや、3年間を見通してその種目の特性に迫っていく大切さについて意見が出た。
- ・教師がその種目のどこに焦点を当てて指導していくか、によって教材や授業展開・単元展開は変わっていくことから、各校の大まかな単元展開や縦の系統などを伝え合った。

(3) 指導者の先生のご指導

- ・バスケットボールにおけるドリブル、パス、シュートセレクトについて。打てるのに打たない、という子どもが多い。パスをすることが目的になっている。シュートを意識するドライブというルールは子どもの意識をシュートに向けるよさがある。
- ・今のルールを、次どうつなげていくかを意識していきたい。ハーフコートからオールコートへどうつなげていくか。最初からオールでやっている学校もあるし、速攻から学んでいる授業もある。
- ・チームミーティングの充実は、積み上げの成果。思考判断段階でよい面があるが、パフォーマンスではできないという子もいる。その時、そうしようとしている姿を認めていきたい。
- ・文科省では、態度を育てる授業を大切に、と言われている。バランスよく資質能力を育てていく。

討議題2 グループ活動における学び合いや関わり合いを深めるための手立てと単元展開はどうあったらよいか。

(1) 発表されたこと

- ・トッププレイヤーのシューズのすれる音に着目させ、フットワークに視点を向けた授業を展開した。低位生には、映像や声かけに加え、場や道具の工夫が必要。男女共修であり、動きのうまい男子から女子は学んでいくことも多い。その利点を大切にしたい。(バドミントン(選択)・若穂中学校)
- ・1本とれる得意技を出すために、相手をどう動かすか、どう技を出すかを考えていきたい。全く経験のない動きをどのように指導していくか。(剣道・緑ヶ丘中学校)
- ・オリエンテーションでは全国大会の様子を見せ、見る視点として声と動きを与えた。(剣道・鎌田中学校)
- ・ICTをただ渡した時、具体的な言葉の出ない学び合いになったので、動画の見る観点を絞って見るようにした。くり返し見ることで、踊ることへの恥ずかしさや抵抗感が薄れ、生徒たちの言葉から、観点到照らし合わせた言葉が出てきた。(ダンス・高遠中学校)
- ・サビとAメロは全員が同じ。Bメロから動きを自分たちで作る。授業の最初にリーダーを集め、今日の授業の見る観点を統一すると、子ども同士見合っていくようになった。できることによって楽しさを味わせた。(ダンス・塩尻中学校)
- ・守備と走塁に重点を挙げた。単元当初から指示を出していく大切さを伝えていたので、どんどん伝えられるようになっていった。(ベースボール型球技・旭町中学校)
- ・シンクロマットは、演技構成に力を向けてしまい、個人の技の習得への意識が薄くなった。マインドマップを使い、自分の目標に向かっていけるようにした。(マット運動・高社中学校)
- ・導入時に内村航平選手の前転が3回入っている映像を見せた。普通の前転から美しい前転へと生徒の視野

が広がった。技の分解図に子どもが『美ポイント』を書き込んだ。これらから単元を通しての思いをもてた。（マット運動・附属松本中学校）

(2) 話し合われたこと

- ・その種目の部活動に加入している生徒や技能を習得している生徒が中心になって低位生を支えたり、話し合いをすすめたりしていく現状がある。そのためのグルーピングについて出し合った。
- ・教師に経験がない競技だとどうしても教え込みの授業展開になってしまう。経験者の他教科教師に協力してもらったり、部活動加入生徒に実演してもらったりする工夫を出し合った。
- ・話し合いの観点を明確にしていく大切さを確認し、その観点について出し合った。
- ・単元に入る時のオリエンテーションの工夫や、ICTの導入・活用の仕方について出し合った。

(3) 指導者の先生のご指導

- ・解決する課題と見通し。解決しなければならないことをしっかりと押さえる支援を明確にしていく。
- ・男女共修か否かの選択は、何をねらうかによる。ねらいを明確にしていく。
- ・タスクゲームを試合につながるものにする。生徒は試合で発揮できることで楽しさが芽生える。また、場面ごとの動きを教師が生徒に頻繁に話をする中で、生徒同士で話せるようになっていく。
- ・ダンスでICTを使う際、子どもたちに観点を示さないと、子どもは揃っているか否かに目が向く。だから見る観点は必要。
- ・教科担任の単元構想を財産化できるよさをいかし、1回立てたものを修正しておき、次年度再度やってみることをくり返していきたい。技の分解図も子どもの実態で加工していきたい。
- ・技能で見る思考は大切にしていきたいが、プレー中に生まれている思考判断は、技能で評価していくもの。技能と思考は重なっているが、思考での評価は、記述で評価していく。

討議題3 陸上競技における教材化と友との関わらせ方、技能向上に結びつく手だてはどうあったらよいか。

(1) 発表されたこと

- ・50m走と50mHのタイム差はどのくらい変わるのか、個人比較とした。高さやインターバルは自由に変えてもいい。インターバルが異なるので、男女共修が可能。（ハードル・女鳥羽中学校）
- ・心理的負荷をみんなでゴールすることで取り除けたが、身体的負荷は残る。そこで、友だちの励ましは有効。走法、フォームなどは学び合いができる。（3分間セームゴール走・泰阜中学校）
- ・ICTの活用。ICTの画面に角度を書いた透明シートを貼り付け、飛び出し角を確認させ、子ども自身が跳躍角度の変化に気付けるようにした。上方向の踏切をつけるために7歩助走し、タ・タ・ターンという最後の3歩のリズムを大切にする。（走り幅跳び・附属長野中学校）

(2) 話し合われたこと

- ・ハードル間の距離や友の走りを見る観点・場所など具体的な例を出し合った。
- ・リズムを言葉で表現すると、子どもたちがイメージしやすい。

(3) 指導者の先生のご指導

- ・ハードル走で50m走に5台ならべることが大切。走りのリズムカルさを実感できるのは5台必要。
- ・考える体育を行うには、子どもたちが追究できるだけの単元時間の確保を。



長野市立裾花小学校 中村深志

V 本年度の反省と来年度の方向

1 本年度の反省

項 目	内 容
○本年度の研究テーマについて	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の生徒はもちろんだが、友とのかかわり、コミュニケーションということを入れていけばよい。 ・運動をする人と市内人との二極化が問題となっている現在、運動の楽しさを味わうことができる体育学習はとても重要。 ・生涯にわたって運動に親しむようになれる子を育てるためには方向としてよい。 ・自ら進んで→苦手な生徒がどれだけ前のめりになれるかを考えることができるテーマでよい。
○研究の主な内容と研究の成果について	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の作り方学年での系統性など多くのことを学ぶことができた。 ・生徒が意欲的に取り組む体育授業については、およそできた。
○研究の方法や経過について	<ul style="list-style-type: none"> ・よい
○研究会当日の運営について	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な実践を聞くことができ、指導主事先生のお話やご指導がとてもわかりやすく勉強になった。 ・討議の時間を長く取れるようにしていった方が深まるのではないかと思った。 ・レポートの本数がやや多い。1分科会10本前後でよい。
○研究集録等のWebページ掲載について	<ul style="list-style-type: none"> ・よい。
○本年度運営全般について	<ul style="list-style-type: none"> ・よい

2 来年度の方向

○来年度の研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・教材化について扱うことは大変参考になりよい。各校で工夫された実践を知ることができた。来年度もこの方向でよい。
○来年度の研究の趣旨	<ul style="list-style-type: none"> ・各校それぞれ方向があると思うので柔軟にしていけることで参加しやすくなる。各校のテーマを大切に研究を進めたい。 ・どういう学習過程を仕組むことで考える活動につながっていくか。 ・運動のもつ特性による本質的な楽しさをあぶりだし、教材化につなげていく。 ・運動の特性に触れた楽しさを感じさせながら主体的に取り組む体育授業の研究。 ・教師側からのアプローチ：実践方法など生徒が達成感をもてる評価方法を研究。
○来年度の研究の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・段階的な練習や教材を入れるのはすごく有効。それを取り入れるねらいやその教材のねらいなどがわかるようにすることにより、わかりやすくなる。
○その他、改善したい点	<ul style="list-style-type: none"> ・各先生方の実践を聞くことができる。経験談が参考になる。

VI あとがき

ひだまりにぬくもりを感じ、枯葉が降り積もる11月20日、長野県中学校連合教科研究会が、県下各地からお集まりいただいた先生方の熱心な発表と討議によりまして、大きな成果をあげて終わることができました。研究会に際し、レポートの作成、日頃からの実践等、本当にありがとうございました。

つきましては、生徒のためにさらに実践を重ね、お互いの励みとすることができればと思います。終日の研究会におきましては、熱心にかつ丁寧にご指導いただきました県教育委員会指導主事の清水直人先生、有坂栄康先生に心から感謝申し上げます。また、綿密な司会計画を立てられ、討議を深めていただいた司会の宮原祐史先生、岡村浩男先生、さらには、当日の各分科会の記録および研究集録の執筆にご尽力いただいた記録者の林努先生、中村深志先生にも深く感謝申し上げます。

じっくりと生徒の姿を語り、自分自身の実践を振り返りながら討議できたのもみなさまのおかげであります。

来年度の研究会には、さらに多くの先生方の参加をいただき、有意義な研究会になることと、皆様には体をご自愛頂きまして、ますます日々の授業実践に励むことを願ひまして、まとめとさせていただきます。



委員長 穂澤 正仁
副委員長 関谷 北斗